

## [特集 I]

### 第4コース

## 「高校生を対象とした『人の行動を考える』 視点を養う教育実践」

吉田俊和\*・坂本剛\*\*・小池はるか\*\*\*

1. テーマ
2. 実施経過
3. レポートのテーマ
4. まとめ

#### 1. テーマ

本コースのテーマは「人の行動を考える」である。人はお互いに集まって社会を作り、その中で個人が社会の構成員となるのであるが、そこでは他者がどのように見たり、聞いたり、考えたり、行動したりするのかという暗黙の法則を経験的に学ぶことによって他者との円滑な関係を形成し、日常生活を安心して暮らすことが可能になる。こうした人間の「社会的動物」としての側面に注目し、いくつかの法則について体験しながら科学的に考える視点を養うことを授業の目標とした。

#### 2. 実施経過

##### 1日目 10:30~12:00 記者会見ゲーム～印象の形成

(本授業案は、小川(2002a; 2002b)を参考に作成したものである。)

1. 授業目的 自己紹介を兼ねた記者会見ゲームを行う。また、課題を通して、人に対する印象がどのように形成されるのかという社会心理学の一分野を紹介すること、コミュニケーションの重要性を理解することを目的とした。

2. 授業内容 ①記者会見ゲーム：各生徒がお互いを知る機会を提供し、サマー・スクールでの友だちづくりのきっかけにすることと、印象形成についての課題の導入とすることを目的とした。

お互いをよく知り、よいところをたくさん見つけるという目標を提示し、記者会見の順番表とゲームのルールを配布した。一人の会見時間は3分とし、3人の記者が質問をした。

②印象形成ゲーム：このゲームは、人は偏った情報から他者の印象を形成している可能性があることに気付かせることを目的とした。

架空の人物(K君)についての情報を10種類用意した。生徒は、情報を1つ受け取り、K君がど

\* 大学院教育発達科学研究科

\*\* 大学院教育発達科学研究科研究生

\*\*\* 大学院教育発達科学研究科博士課程

のような人物かを考える。ついで、まわりの生徒と情報交換して3つの情報を入手させ、さらにK君がどのような人物かを考えさせた。そして10種類すべての情報を提示し、K君がどのような人物かを考えさせる。このK君は「まんがサザエさん」に登場する「カツオ君」をモデルにしており、「カツオ君」についてのイメージを考えさせた。この作業を通して、情報が1つだけのとき、3つ入手したとき、10種類すべてを入手したときでどのように印象の形成が異なるのかグラフ化させ、それについて意見を発表させた。

③中心的特性の存在、初頭効果、新近効果についての講義を行った。

④思いこみや決めつけを避け、お互いをよく知るためにはコミュニケーションが重要であることについて理解を促した。

3. 感想 受講した生徒同士が、今後とも継続する相互作用が期待されるような関係ではないために、記者会見ゲームは不活発であった。しかし感想から、印象形成における情報の役割の重要性や、決めつけがちになる人間の認知の特徴については関心を持って受け入れられていたことが伺える。

(坂本)

#### 1日目 13:00~14:30 記憶

(本授業案は、廣岡(2002)を参考に作成したものである。)

1. 授業目的 課題を通して、心理学の一分野である認知心理学、及び認知心理学の代表的な研究領域である記憶について紹介することを目的とした。

2. 授業内容 ①記憶課題の提示として、生徒の前で記憶課題となる人と打ち合わせをするふりをした。

②認知心理学・記憶という用語の説明を行った。

③「覚えようとしなければ細かい部分は正確に記憶できない」という体験をさせるために、①で記憶課題となった人物の服装や持ち物を思い出すという課題を行わせた。個人に想起させた後、回答を5人のグループ内で発表させ、記録させた。その後、グループごとに発表を行った。

④記憶課題となった人が入室し、回答が当たっていたかどうかを確認した。

⑤「覚えようとしなければ細かい部分は正確に記憶できない」ことを確認し、「人間は覚えなくてもどうにかなるようなことはできるだけ省略をする」と解説した。

⑥100円玉課題：「日常よく見ているものでも細かい部分は正確に記憶していない」という体験をするために、100円玉に描かれているものを正確に思い出すという課題を行った。

⑦⑥は①の課題と同様に、「覚えなくてもどうにかなるようなことはできるだけ省略をする」という人間の記憶の特徴と関連していると解説した。

3. 感想 「普段よく使っている百円玉ですらあんなに覚えてないものと思わなかったので驚いた」等、記憶の曖昧さに気づいたことに言及する感想が見られた。また、記憶に関する疑問・質問を書いた生徒もあり、本時の授業内容に対する興味がうかがえた。

(小池)

#### 1日目 14:30~16:00 知覚と推論

(本授業案は、石田(2002)を参考に作成したものである。)

1. 授業目的 私たちはものを「自分で再構成するように」見ていることを意識させ、それが人や出来事を見る際にも同様であることを理解させるような課題を通して、偏った見方や誤った判断をしている可能性に気付かせることを目的とした。また、社会的知覚と対人関係の理論を紹介する。

2. 授業内容 ①背景や周囲が異なると大きさや角度が異なって見える錯視の例を提示した（エビングハウスの錯視図形などを用いた）。

②同じものでも2つの見え方を示す錯視を提示した（「少女と老婆」図版など）。

③文脈により見え方が異なる例を示した。例えば、「A、B、C」や「12、13、14」と列挙される場合、真ん中の一文字は同一の文字でも、前後に来る文字によって見え方が変わるといった例を示した。

④1コマと2コマの絵から印象を形成する（付録1参照）：1コマ（出来事の一部）だけ見たときと2コマ（出来事の全体）を見たときでは登場人物に対する印象が異なることに気付かせる。

⑤認知的不協和理論とバランス理論についての講義：先行する行動や態度、対人関係により物事の解釈の仕方が異なる（自分なりに整合性のあるように見る）ことを示した。

3. 感想 錯視や知覚的推論は課題として生徒の興味を引いた。「人が主体的にものを見ている」という考え方は新鮮であったことが感想からも感じられる。また、バランス理論などは、日常の行動を想像しやすい内容であったことや、いわゆる心理学らしさを感じさせることから、素朴な面白さを感じ取ったようである。

（坂本）

## 2日目 10:00～12:00 モラルジレンマ・集団のパフォーマンス

（本授業案は、出口（2002）を参考に作成したものである。）

1. 授業目的 課題を通して、教育心理学の代表的な研究領域である道德性の発達、及び社会心理学の代表的な研究領域である集団のパフォーマンスについて紹介することを目的とした。

2. 授業内容 ①モラルジレンマ課題：モラルジレンマ（明確な正解がない道德的な葛藤）場面（吉田他，2001）を提示し、そのジレンマ場面における適切な行動と理由を個人で考えさせた。そしてグループ内で適切な行動について話し合わせ、グループとして選択した行動とその理由を用紙に記入させた。最後にグループとしての結論を代表者に発表させた。

②このような体験によって発達する道德性という用語の説明と、道德性の発達段階について解説を行った。

③NASA月サバイバル問題：この課題は「月に遭難した際に必要な物品をリストから重要な順に選択させる」というものである（出口，2002）。問題シートを配布し、まず生徒個人で適切な物品5つを選択させた。次に適切な物品について、グループで話し合わせ、選択した物品5つを用紙に記入させた。

④物品の重要度が記された用紙を配布し、個人得点・グループ得点を算出させ、グループ得点を発表させた。また、個人による得点とグループによる得点の差を比較させた。

⑤解説：集団で話し合うと逆に間違えた結論にいたってしまう傾向（集団思考）、集団で話し合うことにより極端な決定をしてしまう傾向（集団極性化）について解説した。

3. 感想 「多数数で話すと同違った答えを導き出すということにびっくりした」というように、

集団思考・集団極性化という現象を意外だと捉えた生徒が多かった。また、生徒同士で話し合うという作業自体が楽しいと感じた生徒が多かったようである。(小池)

## 2 日目 13:00～14:30 対人行動・社会的スキル

1. 授業目的 社会的スキルの紹介とスキルトレーニングの経験を通し、対人関係の基本のひとつとしてスキルが存在することについて理解を促すことを目的とした。
2. 授業内容 ①社会的スキルの存在を指摘した。まず、日常生活における葛藤を生じやすい場面を提示し、気持ちよくコミュニケーションを交わせるか問いかけ、そのようなうまくコミュニケーションできるかどうかは社会的スキルに関わっていることを説明した。  
②スキルが欠如する場合、どのようなことが起こるか考えさせ、例を示した。  
③社会的スキルの特徴、プロセスについて講義を行った。  
④対人関係における社会的スキルの機能を考えさせ、解説を行った。  
⑤スキルトレーニングの体験を目的として、「頼む」スキルを例にスキルトレーニングを行った。
3. 感想 スキルという考え方自体が興味深いことであったことが感想の多くから伺えた。またコミュニケーションの重要性に気づき、今後の生活の中で意識的に人と関わっていこうとする姿勢も垣間見られた。(坂本)

## 2 日目 14:40～16:00 他者視点取得

(本授業案は、斎藤他(2002)を参考に作成したものである。)

1. 授業目的 発達心理学の代表的な研究である認知能力の発達段階と心の理論(心の働きや性質を理解する知識や認知的枠組み)について紹介することを目的とした。
2. 授業内容 ①3つの山の模型を教卓に置き、黒板側にいる授業者・教卓の横にいる補助者から見える山を想像させ、絵に描かせた。その後、正解の絵が描かれた用紙を配布した。「この課題は高校生にとっては簡単だが、子どもにとっては難しい」ということを指摘し、発達心理学、及び発達心理学の代表的な研究である認知能力の発達段階を紹介した。  
②5コマ漫画(斎藤他, 2002; 付録2参照)を使用して、登場人物の視点に立たせ、登場人物が考えていることを推測させるという課題を行った。具体的には、「プレゼントを届けた郵便屋さんが考えた、子どもが泣いている理由」を考えさせた。  
④解説:心の理論(他者の心の中を推察したり、他者が自分とは異なる意識を持つと考えることができる能力に関する理論)、及び心の理論と関連している可能性の高い障害である自閉症を紹介した。  
⑤一日を通しての感想(10分)
3. 感想 「自分があたり前のようにやってるコトでも、発達に関係あって、発達途中の人は上手くできないなんてコトは知らなかった」というように、解説の内容についての感想が多かった。自閉症に興味を持ったという感想も多く見られた。(小池)

### 3日目 10:30～12:00 原因・理由を探る

(本授業案は、斎藤他(2002)を参考に作成したものである。)

1. 授業目的 社会心理学のうち帰属過程(物事の理由を探る過程)についてゲームと講義を通して紹介する。

2. 授業内容 ①入手した情報が異なると考えられる理由が異なることを経験するため、原因推理ゲームを行った。まず出来事を提示し、その出来事についての情報の入手の仕方理由付けが異なる様子を体験させる。出来事には「花子さんは悲しい物語を読んで涙を流していた」というものを提示し、その後、半数の生徒には花子さんがその他の状況でも涙を流していたという情報を配布し、また残りの半数の生徒にはその他の人もその「悲しい物語」を読んで涙を流していたという情報を配布する。その結果、「その他の状況」についての情報を入手した生徒は花子さん自身の属性に原因を帰属したのに対して、「その他の人」についての情報を入手した生徒はその「悲しい物語」に原因を帰属していた。

②生徒が自分たちで上記のような例を考えられるよう、原因推理ゲーム作りを行った。

③同じ出来事でも行為者と観察者では原因の帰属の仕方が違うことについて講義を行った。

3. 感想 感想からは①③の両テーマとも興味深く受けとられていたようだが、特に後者のインパクトは大きかったようである。「自尊感情を維持するために理由付けを変えている」というような話に対して、実生活を振り返ると思い当たることは生徒の多くが挙げており、情緒発達のにもセンシティブであった可能性が考えられる。(坂本)

### 3日目 13:00～14:30 ステレオタイプ・内集団びいき

(本授業案は、斎藤他(2002)を参考に作成したものである。)

1. 授業目的 社会心理学の代表的な研究領域であるステレオタイプ(ある集団について人々が抱いている固定化されたイメージ)・内集団びいき(自分の所属する集団をひいきする傾向)について紹介することを目的とした。

2. 授業内容 ①課題1:ある人物の情報が書かれた紙(斎藤他、2002)を配布し、その印象を評定させた。年齢の違う二人の人物についての情報のどちらか一方が配られた。情報の内容は、一方の年齢にとって典型的なものであり、もう一方の年齢にとっては違和感のあるものである。その人物についての印象を評定させ、どちらの人物に良い印象を抱いたか、理由とともに発表させた。

②課題2:ドクター・スミス課題(斎藤他、2002;付録3参照)を実施した。本課題は「医師=男性」というステレオタイプがあると回答が得られない課題である。

③解説:①、②の課題をもとに、ステレオタイプという概念について紹介した。

④報酬分配課題:くじ引きにより所属集団を決め、報酬分配課題(複数のものを2人の人にそれぞれどれだけ分配するかを決定するという課題)を実施した。分配する相手である2人は内集団(自分の所属する集団)または外集団(自分の所属する集団以外の集団)のどちらかに所属している。その結果、一方が内集団成員で他方が外集団成員である場合、たとえ内集団成員がどんな人物なのか分からなくても、内集団びいきがおき、内集団成員に対する分配が多くなる現象が見られた。

⑤内集団びいきという概念について講義を行った。

3. 感想 「もうちょっと物事をいろんな視点で見る能力を養えたら、ドクターミスが女であるコトに気づけたのかもしれない」「自分が医者というコトバにどれだけ偏見があったか分かった」等、課題2の体験から、多くの生徒がステレオタイプの判断や偏見について感想を書いていた。

(小池)

### 3. レポートのテーマ

レポートのテーマは「うわさをする事のよい点・悪い点」「集団のリーダーの機能と特徴」のいずれか一方を選択することとした。テーマは、自分で調べること・自分で論理的に考えることを促すため、あえてコースで学んだこととは関係ないものを選んだ。

### 4. まとめ

まず本コースは、社会心理学を中心に、対人関係に関する心理学の諸分野を扱ったことで、多くの生徒にとって「心理学の幅広さを学ぶことができた」と感じられる内容であった。このことは様々な体験的な課題・作業を取り入れたことによって、「楽しみながら心理学を体験できた」と思った生徒がいたことと共に強調できることであったと考えられる。特に、いくつかの課題では生徒同士でコミュニケーションをとる手続きをとっており、それが好評であった。

他のコースと比較して講義形式の授業時間が多かったため、講義を受けたことに対し「大学で学ぶことを先取りできてよかった」と思う生徒も存在したが、一方では不満に思う生徒の存在もあった。実際の授業において、授業者の期待通りの反応がいつも見られたわけではなく、講義形式の授業について今後どのように実践するのか検討する必要があるのはもちろんであるが、授業後の感想からは、講義からでも強いインパクトを与えている部分のあることが散見された。今回の対象は高校生であり、授業内での即時的な反応よりも、一見潜在化するかのようになりに内省的に考えてみるという傾向が見られた可能性が考えられる。

(坂本・小池)

### 引用文献

出口拓彦 2002 みんなで考える 吉田俊和・廣岡秀一・斎藤和志 編著 教室で学ぶ「社会の中の人間行動」 明治図書

廣岡秀一 2002 記憶のあいまいさを体験する 吉田俊和・廣岡秀一・斎藤和志 編著 教室で学ぶ「社会の中の人間行動」 明治図書

石田靖彦 2002 ものの見え方・見方 吉田俊和・廣岡秀一・斎藤和志 編著 教室で学ぶ「社会の中の人間行動」 明治図書

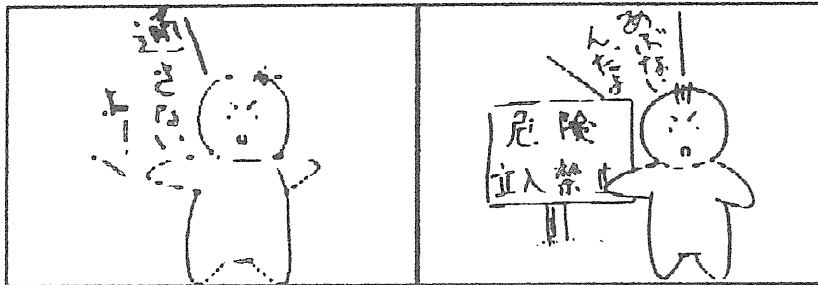
小川一美 2002a 豊かな人間関係をめざして 吉田俊和・廣岡秀一・斎藤和志 編著 教室で学ぶ「社会の中の人間行動」 明治図書

小川一美 2002b 人に対する印象 吉田俊和・廣岡秀一・斎藤和志 編著 教室で学ぶ「社会の中の人間行動」 明治図書

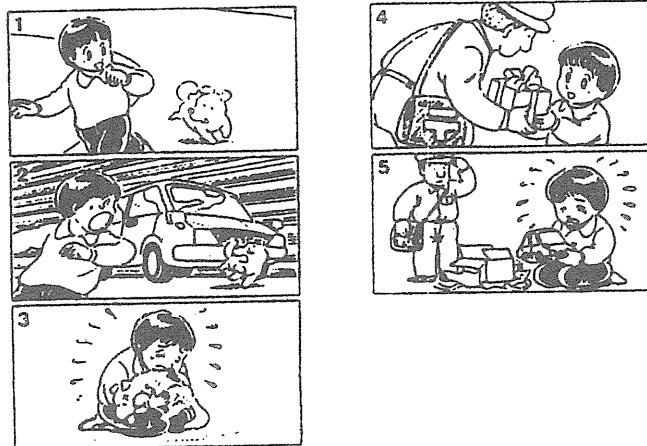
斎藤和志・小川一美・坂本剛・出口拓彦・小池はるか・廣岡秀一・石田靖彦・吉田俊和 2002 「社会志向性」と「社会的コンピテンス」を教育する(3) 名古屋大学大学院教育発達科学研究

科紀要 (心理発達科学), 49, 227-245.

吉田俊和・小川一美・坂本剛・出口拓彦・斎藤和志・廣岡秀一・石田靖彦・小池はるか 2001  
「社会志向性」と「社会的コンピテンス」を教育する(2) 名古屋大学大学院教育発達科学研究  
科紀要 (心理発達科学), 48, 233-255.



付録1. 2コマのまんが



付録2. 5コマのまんが

ドクター・スミスは、アメリカのコロラド州立病院に勤務しているとても腕のいい外科医です。仕事中はいつも冷静で、しかも判断は大胆かつ慎重で、州知事にまで厚く信頼されている人です。ドクター・スミスが夜勤をしていたある日、緊急外来の電話が鳴りました。交通事故の怪我人を今からその病院へ運び込むので手術をしてほしいといっています。父親が息子と一緒にドライブ中、ハンドル操作を誤って谷へ転落し、車は大破、父親は即死、子どもは重体だと救急隊員は告げました。20分後、重体の子どもが病院に運び込まれてきました。その子どもの顔を見て、ドクター・スミスはあっと驚き、その場に立ちすくんでしまいました。その子は、ドクター・スミスの息子だったのです。

さて、ここで問題です。即死したお父さんと、重体の子どもと、ドクター・スミスの三人の関係は何だと思えますか？

付録3. ドクター・スミス問題